



令和 元年 5 月 1 日 発行 第 25 号

目 次

巻頭言

日々思うこと

谷口 良孝 …… 1

陶芸家のひとりごと

模倣から生まれるものは？

市川 博一 …… 2

陶芸道中いざ凝り気

陶芸は楽しく自由に… が基本

久保田 忠男 …… 4

私の作品自慢

ピース貼り付け中空作陶

増田 淳三 …… 7

陶芸技術ノート

木箱の役割

森 久登志 …… 10

展覧会見聞録

大徳寺龍光院

国宝曜変天目と破草鞋

三谷 幸史 …… 11

活動報告

…… 14

会員便り

…… 15

編集後記

…… 16

編集委員会

委員長 今井 眞正

委員 寺池 尚孝 谷口 良孝

片岡 俊彦 増田 淳三

巻頭言

日々思うこと

副会長 谷口 良孝

チャンスはどこにあるのかわかりません。私は先輩、友人、知人から始まり、そこから連鎖してさまざまな方から仕事のオファーをいただきました。後輩の誕生日パーティーに出席したことから仕事をいただいたこともあります。たまたま出かけていたら、そういう流れになった。人生とは案外そういうものなのかもしれません。ただひとつ言えるのは、チャンスは「人との出会い」からやってくるということです。しかも、いつもと違う場所に出かけるほうが、思いがけない可能性が広がる気がします。初対面の方にもにこやかに対応し、好奇心を持ってお話しする姿勢が大切だと思います。

タイミングが合い、心が動いたら気軽に出かけてみる。そのためには、人前に出ても恥ずかしくない TPO に合わせた身だしなみができ、マナーを心得ていることは意外に大きい力になります。ご紹介いただいた方とまず、お互いの人柄がわかる程度に交流し、おたずねがあったら自分が携わっている仕事や経歴などをお話しして、自分という人間を理解してもらう。そこがスタートラインだと思います。興味がわいたイベントには自然体で参加したいと思ってたす

私自身が日頃から心がけていますが、「スケジュールをいっぱいにしない」ということです。自分のキャパシティを超えないようにスケジュールを調整するのは、健康で息長く活動をしていくために、絶対に欠かせないことです。お声がけに感謝しつつ、時にはオファーを見送る勇気も必要です。中々、出来ていませんが ……。

スケジュールを詰め込まないのは、新しいチャンスを迎え入れる上でも欠かせません。抱えている仕事でいっぱいだと、興味を感じた新規のご依頼があっても、時間が取れず、お断りすることになってしまいます。先輩の方々は分刻みのスケジュールで動いていらっしゃる場合が少なくありま

せんが、ご自身の多忙さを自慢したり、言い訳したりはなさいません。自分のすべきことを淡々と、しかも忙しいような素振りも見せずに鷹揚に構えていらっしゃるものです。仕事以外のおつき合いだけでないご縁を広げるためにも、余裕が必要です。

1日は24時間しかなく、体はひとつしかありません。限られた時間を有効に使うには、今の自分にとって必要なものとほしいものをきちんと見極め、優先順位を決めていくことが大切です。私は次の3つを常に意識しています。

- ・自分の時間がどれだけあるのか
- ・今お受けしているお仕事がどのくらいあるか
- ・決まった予定を引いた残りの時間がどのくらいあるか

自分のキャパシティがわかっていれば、オーバーワークになることが避けられますし、お仕事の依頼があったときも、お受けできるかどうか、すぐに判断できます。漠然と時間を使うのではなく、「どこで・なにを・いつまでに」をきちんと整理しておけば、お仕事にも余裕を持って取り組みます。私たち陶芸家はこれが一番大事だと思っています。「この日はオフだから」と思えば、心おきなく友だちと会ったり、趣味に打ち込んだりもできるでしょう。

成功したら自分の手柄だと思い、失敗したら人のせいにする、そういう態度では自分本位すぎて、運を引き寄せられません。人間であれば、プラスの感情もマイナスの感情も、両方あって当然です。でも、何事もニュートラルに受け止め、理性で判断すれば受け入れやすくなります。そしてなにより感謝を忘れず、謙虚に、等身大の自分を見つめるように心掛けています。「やってもらって当然」という尊大な態度は問題ですが、自分を卑下しすぎて「こんな私なんかでいいのでしょうか」と自信なさそうな態度で対応するのも、お声掛けくださった方に失礼です。無理に背伸びをせず、今の自分の力でベストをつくしていきたいです

何より忘れてはならないのが「感謝」の気持ちです。人は自分のためにがんばってくれた人を評価し、そのお返しをしようと思います。ご縁があった方のお役に立つつもりで、末長くいい関係を築いていくことを心がけています。

陶芸家のひとりごと

模倣から生まれるものは？

陶芸家 市川 博一

学生時代の恩師、鈴木治先生の言葉に、「模倣から始まるのは当然だ」というのがあります。作品作りに悩んでいたころ、この言葉はいつも心の中にありました。

私が影響を受けた陶芸家に、加守田章二という方がいます。京都市立芸術大学の先輩にもあたり、学生の頃にこの方の名前と作品を知りました。残念ながらほどなく白血病で亡くなりましたが、当時、私だけでなく影響を受けた若い作家は多かったと思います。作品についてはご存知の方も多いと思いますが、プリミティブなイメージの作品です。20代の頃、自分の方向が見当たらず、試行錯誤し、もがき苦しんでいた時に、いつも気にかけていた作家のひとりです。



加守田章二 作

私は大学生から陶芸を始めましたが、陶芸の勉強を始めたばかりの私にとって、陶芸家である父や父の作品の存在は、とても煩わしいものでした。それは、子供の頃から見慣れてきた父の作品がとても好きだったからだと思います。父は自然が好きで、作品に小さい生き物を添えるなど、磁器による柔らかい表現を追求していました。作品を作

るときは、当然のことながら自分の好みの作品から影響を受けます。しかし、身近にありすぎた父の作品は、制作するとき目の前にちらつきます。私も、子供の頃父に連れられ魚釣りに行ったり、裏山を走り回ったりと自然に触れて育ってきたので、大学を出て公募展に出品し始めたころは自然をテーマにした作品作りをしていました。ただ、父をまねた作品を作るわけにはいかず、意識的に土もので別の表現を求めていました。加守田作品は父の作品とは違う雰囲気を持っており、私の気持ちは加守田作品に傾いていきました。



市川廣三 作 「閑日」 1981年 第13回日展

私が大学院生の頃だったと思いますが、窯の冷却時に還元をかける冷却還元という焼成技術についてのレポートが研究室に届きました。瀬戸窯業高校の生徒たちの実験レポートだったと思います。ご存知の通り、冷却還元で焼成すると、赤土が深みのある黒になります。赤土に白土を加えて濃さを変えていくと、冷却還元では土肌が黒からグレーになり、須恵器のような土肌のものも出るようになりました。黒い土肌のは土に黒い顔料を混ぜて人工的に作るもの、というのが当たり前のようだった時にこの技術は画期的でした。その当時、公募展を見ても、釉薬を使った作品よりも焼き締め作品が多かった頃です。焼き締めは土の表情がそのまま出ますが、冷却還元で焼成するとさらに表情に深みが加わります。周りの仲間も、皆一斉にこれに飛びつきました。窯出しする度に、黒っぽい焼き締めの作品ばかりが出てくるという時期がありました。

私は、常々流行っているものには、つい手を出

すのを躊躇してしまうほうです。自分の方向を見つけ出そうとしている時に、安易に流行りのことをすると、正しい自分の方向を見失うような恐れをいつも感じるため、この時も、テストはしたもの、冷却還元では作品らしきものは何も作らず、人と違うものを作らないといけな、とそればかり思っていました。

大学を離れた後、私が始めたのは釉薬で模様を作る、というものです。焼き締めのものが流行っていたのに逆行する方向で模索を始めました。釉薬の重ね掛けや掛分け等様々なことを試しましたが、隣り合った釉薬が互いに混ざりあい、模様の輪郭がにじんでしまって、どうしても私がイメージしているものにはなりませんでした。それぞれの釉薬をはっきりするにはどうすればいいのか……。

ある時、何気なく立ち寄った画材店で細いテープを見つけました。一般的なマスキングテープと違い、デザインに使うものらしく曲線を貼ることもできます。このテープで模様を作り、テープで囲まれた部分を釉薬で塗り分けてテープをはがすと、隣り合った釉薬の間にテープの幅の隙間ができ、焼成すると、隣同士の釉薬はにじみあうことなく、くっきりとした焼き締めの線で区切られ、クリアな模様を作ることができます。

ようやくこれだと思える独自の方法を見つけた思いで、その後発表を続けていくうちに作品の内容も少しずつ納得できるものになってきました。最初の頃は、加守田作品の模様をアレンジしたものもありました。当然まねをしている、という批判もありましたが、そのまま何点も作り続けているうちに様々な工夫を加えるので、いつの間にか加守田作品と比べられることはほとんどなくなりました。私の個性と認められたからでしょう。

作品を作り続けていると、時折別の人の作品の雰囲気を感じさせるものになることがあります。まねする意図はなくても、一時的に進む方向がクロスするからです。でもそこでやめてしまえばまねだけで終わってしまい、自分のものになりません。作り続け、展開し続けることだと思います。



市川博一 作 「風」

鈴木先生は、模倣から始まるのは当然だ、と仰っていました。ただ、模倣だけで行くのは困るけどなあ、とも。栗木達介先生は、作品作りには、その人の生き立ちがすごく影響する、と仰っていました。その通りだと思います。人の影響をすごく感じる作品も、当然人格も性格も生まれ育った環境も違うわけですから、続けていると必ず独自のものが表れてくると思います。



市川博一 作 「刻」

陶芸の仕事を 40 年続けています。40 年の間、新しいものを作る、という意識を常に持ち続けるのが当たり前になっています。今作っている作品は、前に作ったものより少し新しくしたもの。次の作品は、今の作品からまた少し進んだもの。少しずつ前に進んでいると、何年か経てば大きく進歩しているのではないかと、そう思いながら日々制作しています。

陶芸道中いざ凝り気

陶芸は楽しく自由に… が基本

会員 久保田 忠男

私と陶芸との出会いは、父が花・盆栽を趣味としていましたので、信楽へ植木鉢を買いに運転手としてついて行った時のことでした。その時に“ああ、こんな所が有るのやなあ”と思った記憶があります。また、従兄弟が美術の教師をして居ましたので、灯油窯を購入した影響で、より興味を持ちました。



門の右側に設置 作品



電気窯

私は京都・精華町の住民ですが、少年時代の家の近辺は春には多種の花が咲き、田んぼにはオタマジャクシ、小川にはメダカ・小フナ、樹木にはクワガタなどがいて四季が感じられ、自然に恵ま

れた土地柄でした。遊び場所も多くあり、勉強は家ではしませんでした。自然に触れること、感じる事が勉強になりましたが、やはり学校の勉強はしておくべきと今は反省しております。しかし今では、この経験が作品に良い影響を与えていると思っております。

さて、陶芸の作品には、形(技術・個性):内(背景・思い)、つまり目に見えるもの:見えないものが考えられます。

「形」は…… 成形・土・釉薬・絵付け・窯等で作品を作り出すことが出来ます。こう云った材料の種類の使い方により様々な作品が完成いたします。そして「作品は人なり」と云われます様に個性も重要であると考えております。私は近代陶芸作家の中でも加藤唐九郎(志野)・藤原 啓(備前)・川喜田半泥子(三重・津)などの作品に対して特に興味を持っております。

この3名の陶芸家の言葉を紹介致しますと、

加藤唐九郎 世界の一級品の中で、すみからすみまできちんとできているものはひとつもない。どこか一点が非常によくできているが、あとはめっちゃめっちゃなものだ。又、大家ちゅうものは会っても偉く見えないですね、気取らないから。まるっきり人間丸出しで、子供みたいな気持ちじゃから。

藤原啓 簡単で素朴で大した魅力はないが、何か知ら引きつけられるものがあるって、何時まで見ても飽きのこない作品が好きです。

川喜田半泥子 芸術に歳も身分もへだたりなし、やきものは土であればよし、釉は灰であればよし、いろいろあるのは迷いなり、やってやってやりきるに限る、三昧に入ればよし、物に打ち込めるは幸い也。
又、「手にも取れないあの池の月影で苦勞をするわいな」・「蓮の葉にたまりし水は釈迦の涙があり

がたや、ソコへ蛙がピョカと出てソレハあたいのシッコだよ」…プロではなく自由・自在の人です。

このように、言葉でも読み取れる様に強烈な個性が感じられます。では、この個性とはいかにして生まれ出るのか。生きた環境・修業・勉学などと考えることが出来ます。しかしながら、この個性を作品に表現する能力が重要で、課題となっ参ります。

「内」は…… 私個人としては禅・京都学派のファンであり、興味を持っており、考え方に影響を受けていると思っております。禅は「曹洞禅:只管打坐」と「臨済禅:公案」に代表され、有名です。禅は単刀直入に申しますと、本来の面目の自己・一無位の真人・無形の自己・独脱無依つまり「無」です。これだけです。不立文字 教外別伝 直指人心 見性成佛と云われ、修業により「無」の境地になる保証はないようです。



第1回 作品展「西田幾多郎の世界」

京都学派には西田幾多郎・久松真一・梅原 猛など継承者がおられますが、その中で、久松さんの提唱されるF・A・S禅は、

F --- 「形なき自己にめざめる」

A --- 「全人類の立場に立ちましょう」

S --- 「歴史を超えた歴史をつくりましょう」と定義されます。

Fは浄土宗では“往相”にあたります。何の束縛もなく自由、自在になり「仏に会っては仏を殺す、祖に会っては祖を殺す」とも云われ、仏も祖にすら束縛なく超える心の有り様を云っております。

A・Sは“還相”になります。この動きが重要です。A・Sの動きがないと黙照禅と云われています。F・A・Sは一体不二と言えます。



第4回 作品展 「無相のゆくえ・往相」



「還相」

芸術と禅との根底は深い関係があると思えます。西田幾多郎・梅原猛の言葉を紹介します。

西田幾多郎 哲学の動機は悲哀である。
「人は人、吾は吾なり、とにかく
吾行く道を吾は行くなり」
「わが心深き底あり、喜も憂の波
もとどかじと思ふ」

梅原猛 芸術家というのは神様が乗り移る存在だ。
赤ん坊のような新鮮な感受性で
「創造すること」を楽しんでほしい。

今年1月にお亡くなりになり残念です。

先人の知恵を学び、参考にして陶芸に活かしたいと思っております。



第8回 陶芸アマコン大賞 入選 「思い出の飛行塔」



「兜・孔雀」

私の作品のめざす作風は作意、技術等を感じさせない事です。作品を目にされたときに“形は簡単で素朴で、内に何かあるなあ”と感じてもらえる作品を目指したいと考えております。時々には作りたい物を作る、展示用の作品は特に意識しないで、その根底の姿勢は楽しく自由に… が基本と思って精進をして行きます。

このような作品だと、展示会の時に評価のしようがなく審査員泣かせです。恐縮します。

この文章を読み返しますと、ユーモアもなく！おもしろさもなく！硬くて、もう読みたくない会員の方もおられると思いますが、どうか、ご容赦下さい。私は鈍才なタイプですが、本当はユーモ

アのある、普通の人間だと自身では思っております。(笑)



第6回 作品展「風神・雷神」



第6回 作品展「鉄人28号」(左側)

ったらダメです”と罰点を食らった。自慢のつもりがお叱りで、以来自慢は封印している(つもりでいる)ので、このタイトルは書きにくい。

時が過ぎ会社に入ったら、仕事は、今ではもう石器時代ぐらいに古い技術ながら当時は最先端産業である真空管であった。全てがミクロン単位の仕事で、中でもタングステンにアルミナをコート、焼成する工程は1650℃の筒状、開口型水素還元炉で、時々風が吹き、空気が混合されるとドカンと爆発した。アルミナ層の公差はマイクロメートルで計る程にミクロンの精度を要した。同じ焼き物経験ながら、いわゆる陶器とは全く縁遠い世界であった。

サラリーマンも終えたころ、縁有って五条坂の陶芸教室にお世話になった。最初は皿やご飯茶碗作りであったが、何しろミクロンの世界の経験がトラウマで、やたら素焼き前の正確さが気になり、修正したりして手間暇かけたが、それが一旦焼成すると、収縮するわ、歪むわ、でガタガタの物ができた。ミクロンの世界が消え、ミリでもよく、しまいにはセンチ単位で歪んでも、それが風情だと受け入れられるようになった。そんなある日、教室で風鈴作陶の課題が出された。

風鈴は相当高音を出すので、素人ながら、薄い風鈴なら音色が良いような気がした。磁器をどうして薄くするのか、色々聞くに磁器の伊万里では、

私の作品自慢

ピース貼り付け中空作陶

会員 増田 淳三

始めから私事で恐縮ながら、祖父が街の鍛冶屋で、幼稚園児から鞆(ふいご)のレバーを押したり引いたりしていた。当然、遊びは鉄の塊やブリキで、小6の夏休の宿題はブリキの半田付けで作品を出したら、先生から“お父さんに作ってもら



写真1 初めて作ったピース貼り付け風鈴

乾燥後、内側を轆轤旋盤で削るのだと言う。教室にそんな便利な機械はなく、カンナで削っては見たが、ミクロン世界のトラウマは厚みの不均一が気に入らず、ふと思いついたのが磁器土を薄い板状にして縦に貼継げば出来るのではと言う方法であった。早速挑戦して出来たのが写真1である。薄い磁器土は粘りがなく、作陶には扱いにくくて試行錯誤したが、厚み0.5～1mmで、叩いてみると思い通り澄んだ音が出た。もう、十数年前の事であった。先生は、“あまり見かけん法やな”と言うので、つい開発好き好きのトラウマが蘇り専念、これがライフワークに成るとは思いもよらなかった。

その内、清水焼団地で“アマコン”なるコンペが有る事をしり、初参加は“香炉”で入選を頂いたが、出品作品を拝見すると、どれもこれも高度で大きな作品群で、とても足元にも及ばんな～と吃驚した。教室の先生曰く、“コンペはある程度大きくないと！”と言われ、それなら風鈴を少し大きくしてみるかと挑戦して、今度は陶土でわりと難なく仕上げて筒状の作品が出来上がった。(写真2)これをアマコンに出すと、有り難い事に佳作を頂いた。



写真2 防人の詩

その後、このピース貼り付けでしか出来ない物は何かと追究しながら、色んな形状の作陶を試みたが、形状は紐でも出来る話で、表面がうろこ状に張り付けてあるだけで、何が違うのかと疑問が

常に付きまとった。しかし、特長はやはり薄さと信じ、ひたすら大きい作品に挑戦したそれが写真3.である。これは全長70センチあり、ピースは3千枚程を張り付けている。



写真3. 大地礼賛

中空作陶なので、経験上、貼り付け作業が常に上向きであれば意外と高く積めることが判っており、数か月かけて丁寧に積み上げた。しかし、ある時、下部で突然の割れ目ができ、大急ぎで内側から補強した。幾ら薄く軽いと言っても下部が上部の重量を支えきれないのである。“そんな事は常識やろう、だから大きな作品は下部の強度が必要で10mmとか必要なのだ”とご指導が飛んで来そうである。事実、素焼きの段になり、教室の横で作陶をしておられた、故 藤平伸先生(京都芸大教授)が、これは窯の中で“ヘコタレルなあ！”とのお見立て、しかし、見事に窯から略そのままの形状で生還してくれた。

どうやら、こんな方法はプロの先生にも常識外なようで(プロはこんな面倒くさい事はやらないと言う事らしい)、アマとしては独自の方法を見つけたようで、心が躍った。さて、どこか公募展にと思ったが、アマコンや公募展も規格外サイズで、臆面もなく京都岡崎や名古屋まで運んだが、当たり前前の事ながら、見事に搬入と選外引き取りだけに奔走した。

その後、サイズ制限が少し大きい、京都市陽市に地域限定の小さなコンペが有り、応募した所、城陽パーク賞を頂き仰天した。陶芸部門審査委員は川上力三先生(元走泥社)で、“あまり見た事が無い方法で丁寧に作ってある”とのご講評は、素直に嬉しく、以降この方法を継続する力を頂いた。

さて、その後も、いろんな形に挑戦したが、作りはだんだん丁寧になり、円形部の歪などは、トラウマのセンチでもミリでもコントロールできるようになり、色んな作品を沢山作陶した。(写真 4)



写真 4. 作陶群 (10 年余の歳月)

しかしである、公募展では一向に鳴かず飛ばずになった。ひたすら形に拘り（それしか思いつかなかった）、やたら手間暇をかけることだけに陥り、時々賞を頂いたが、自身も何やら閉塞感があつた。ある時、公募展の審査員の方に素直に意見を聞いて見た。作品の風情は良く覚えて頂いているようで、曰く、“あれな、最初の作品（写真 3）があまりにもインパクトがあり、その後の作品はだんだんと丁寧になり、遊びもなく、無作為の所も消えて面白くも何ともない、よくアマチュアがよく陥ることだ”と一喝！ 誠に率直な納得ゆく感想を頂いた。

薄々は気付いていたが、ご指摘の通り、作品は丁寧となり（上達した？）、もはやラフには作れなくなり（緻密に作りだした）、形が違うだけで、どうも意外性や面白さに欠けると感じる自身のもやや感をズバリご指摘頂いた。さて、初心に帰るとは何なのか、プロには成れないアマチュアらしいとは何なのか、自由な発想とは何なのか、確かに作品を見て頂くと、手法はあの男だと覚えて頂けるが、そこから抜け出せない。一体何をすればこの閉塞感を抜けられるのか大いに悩むに至った。

悩む中、ふと、以前作った蠟燭ランタンを思い出した。通常は作陶後、光の通過穴を空けるが、この方法で窓を空けた経験があつた。少し思い切って風穴を開けて見た。それが写真 5 である。



写真 5. See through Tube

少しは軽やかな作品が出来上がり、2018 年作品展では思いかけずも、初めて会長賞を頂いた。10 年目にして、少し開けた風穴で作風にも風穴があいたのかかもしれないと思った。

その後、2019 年 3 月末の“伊万里国際アマチュア陶芸展”が 36 回目の最終回で有る事を知り、応募したいと思った。実は 2018 年には優秀賞を頂いており、最終回は全く自由な気持ちで、思い切って数種類の大きいサイズの形で形が異なるピースを積み上げて見た。初期のリング型の形はどうしても崩れ落ちそうで、妙な歪がある形となり、思いとは少々異なる色にもなったが、自分的には今までとは異なる作品が出来たので、慎重に梱包して伊万里に送りだした。

伊万里には無事割れずに着いたと連絡を受けほっとしていたが、数日後、電話があり、最高賞である鍋島賞を頂いたと知り仰天した。

2 年連続受賞まず無いと思っていたので、素直に喜びと吃驚が混在した。実はこの公募展、審査委員が 14 代中里太郎衛門（唐津）14 代今泉今右衛門（人間国宝、有田）、15 代酒井田柿右衛門（有田）という歴代伝統がある先生方で、直々に見て頂けるのは誠に稀有な事で有り難い。ご講評では、独自性、歪がアマチュアらしい、色が狙い通り、最終回に相応しいと過分のお褒めを頂戴した。正

直、これは 10 数年の集大成と言うよりも、やっと、突然に、10 数年をへて初心に戻れた作品だったのかもしれないと思った。



写真 6. 悠久の譜

余談ながら過去 36 回で応募者は延べ 1 万人を遥かに超えるそうで、中でも有田、伊万里などの小学生も 1 年がかりの作品を作るとか。小学生が一般と同じ盾を市長から直々に受け取る笑顔を見ていると陶器産業が難しい時代とはいえ、さすがに伝統の伊万里・有田だと思った。

さて、自慢が過ぎてお耳触りはご容赦を願いたいが、さて次はどうするのか新たな悩みが生じてしまった ……。

陶芸技術ノート

木箱の役割

森木箱（木箱製造・販売） 森 久登志

木箱についてのお話です。

主に使用する桐材は、古来中国からの慣習によって親しまれて来ました。桐は幸福をもたらすと言われ、家を建てた際に植えられました。日本では、湿気に強い桐材でタンスや箱が作られるようになりました。独自の進化を遂げた日本の工芸において、特に茶道の世界には重要です。それは、木箱の使い方で説明がつきます。まず、二の上の蓋書きで仕様・内容物のジャンルを表記、作者名と落款を入れる。これだけで中身の概要がわかります。そして、箱自体の仕様では、二方棧、四方棧、蓋の甲盛り、胴体部分の三枚組、印籠型



これは、木目を引き立たせた印籠型の箱です。観賞用のもので、用途は確定していません。



桐材を使用した太巻きの芯といいます。掛け軸の軸を挟み込み、強制的に直径を太く巻くための、所謂、「函」といえます。



「しきし」と呼ばれる、野点などで移動の際に使用される形です。出したり片づけたりにも便利です。



天板は樺材の亀形印籠です。

等によりグレードによって中身の価値を表します。もちろん、茶道御家元の宗匠にお墨付きをもらうためには、それ相応のグレードの箱でなければ通りません。

箱の製作では、そのグレードのランクにより難度は比例します。道具の手入れやメンテナンスも繊細さが必要とされます。柔らかい素材の桐は、刃物もよほど切れないときれいに仕上がりにません。硬い木を削るときと、桐を削るときはやり方が異なります。サンダーやサンドペーパーのみで仕上げたものと刃物仕上げで仕上げたものとは、蓋書きの際や経年のツヤに歴然と差が出てきます。

最後に、木箱をより引き締めるのは真田紐です。上等のものには絹紐が使用されます。こうして桐箱を見て、フォーマルかカジュアルなのかを判断できるわけです。基準で言えば、大体上代の1割以上の箱に入れてあるのが常識とされています。

展覧会見聞録

大徳寺龍光院

国宝曜変天目と破草鞋

(株)和蘭 陶磁器販売 三谷 幸史

『中国南宋時代（12-13 世紀）に、福建省の建窯（けんよう）で焼かれた天目茶碗を建盞（けんさん）と呼びます。曜変天目（耀変天目とも表記）は、大量に焼かれた建盞のうち、窯内で偶然に美しい結晶が生じたものを指します。唐物全盛の室町時代には、茶碗の中で最高峰に位置付けられました。

日本にのみ伝世する曜変天目のうち、大徳寺龍光院のほか、静嘉堂文庫美術館と藤田美術館に所蔵される計三碗が国宝に指定されています。2019 年春に開催される下記展覧会において、ほぼ同時期に三碗がそれぞれ展示されます。』

（以上、ミホミュージアムホームページより引用）

ミホミュージアムのホームページにも書かれているようにこの春に国宝の曜変天目三碗がほぼ同時期に各所で展示されます。私はその中でも一番目にする機会の少ない大徳寺龍光院の曜変天目をミホミュージアムで拝見しました。一昨年京都国立博物館にも展示されましたが、改めて間近で見ることができたのは大変幸運でした。

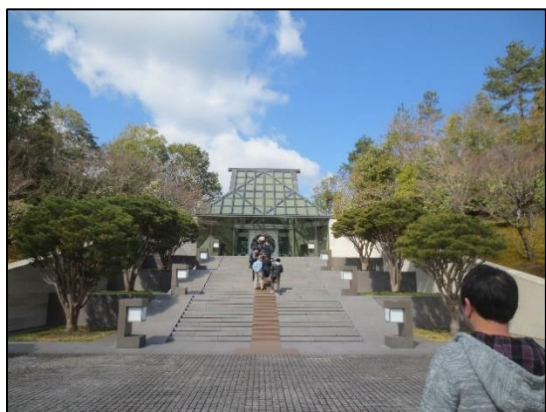
数年前、新たな曜変天目発見かと巷をにぎわせたのも記憶に新しいです。

この他の二碗はそれぞれの所持している美術館で拝見しておりましたので、国宝と呼ばれる三碗すべてを拝見できたことになります。

3月の最終の日曜日にミホミュージアムに赴いたのですが、その日は天気に恵まれました。行かれた方ならご存知かと思いますがレセプション棟から美術館棟まで電気自動車に乗って移動するのですが、前日にホームページで状況を調べたら、来館者が多い場合、電気自動車は運行しませんとのことだったので、開館と同時に中に入ればと思い、少し早めに京都を出て現地に向かうことにしました。



普段は電気自動車に乗せていただけるトンネルを歩いて移動。



開館前ですが、もうすでに数人が並んでいました。

車で9時30分頃に着いたのですが、もう多くの方が美術館棟の入口に並んでおられていました。開館を少し待ってからまずは一目散に、曜変天目

のもとに急ぎました。幸運にもほぼ最初にじっくりとみることができました。



国宝曜変天目 ※内覧会時に撮影



絶妙な照明によって神々しさを醸し出していました。 ※内覧会時に撮影

曜変天目を見ていると、その美しさに吸い込まれそうになります。展示の場所、方法、照明にもよるかとは思いますが、なんとも神々しい感じがしました。よく天目をその中に宇宙があると例えられることがあります、まさにその中に壮大な宇宙を宿したような発色に見惚れてしまいました。この世にしかも日本に三碗（重要文化財等を含めると日本には六碗存在します。）しかない国宝の曜変天目茶碗をこの目で見てかなりテンションが上がりながら、入り口付近の展示物を見ていなかったのもう一度入り口付近まで戻ろう（本来は逆行なのでダメだと思います。）と思い、振り返るとすごい長蛇の列ができていました。身動きができないので、そのまま順路にしたがって前に進むとすぐにもう一つの国宝である「密庵咸傑墨蹟 璋

禅人宛法語（みったんかんけつぼくせき しょうぜんにんあてほうご）」が目前に現われました。

その同じ部屋には重要文化財の油滴天目も展示されていました。



重要文化財 油滴天目 ※内覧会時に撮影

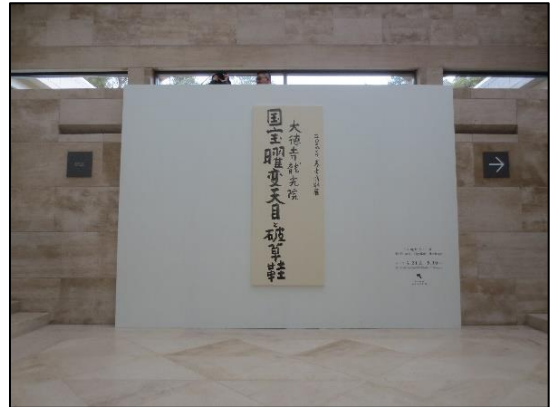
この他にも多くの寺宝が展示されていて見ごたえ十分でした。元来、龍光院は一般に公開をしていなくてそのほとんどが初公開の寺宝が多く陶磁器以外にも興味をそそられるものばかりでした。

龍光院は慶長 11 年（1606）、筑前福岡藩主黒田長政が、父君・黒田孝高（よしたか 如水、官兵衛）の菩提を弔うために創建されました。黒田親子が帰依していた春屋宗園（しゅんおくそうえん）に龍光院開創を請うのですが、春屋が老いていたため江月宗玩（こうげつそうがん）に譲り龍光院の二世となります。この宗玩が堺の豪商・天王寺屋津田家の出自を持ち合わせながらも 6 歳で得度していました。この宗玩の実父は津田宗及（そうぎゅう）であり、織田信長、豊臣秀吉の茶堂（さどう）として仕え、茶道を深く極めていました。しかしながら、大阪夏の陣の勃発により 130 年近く栄えた天王寺屋はその歴史に幕を閉じます。その縁があり、天王寺屋由来の名品の数々がこの龍光院に伝えられています。

そのような経緯もあり、特に龍光院の国宝曜変天目は他の二碗の所有者が数名変わっているのに比べ、ほとんど他の手に渡らず、所有者が変わっていないのも特徴です。

さきほど述べましたが、曜変天目はこの世に六碗存在します。国宝は三碗（所蔵は藤田美術館、静嘉堂文庫美術館「稲葉天目」、大徳寺龍光院）で

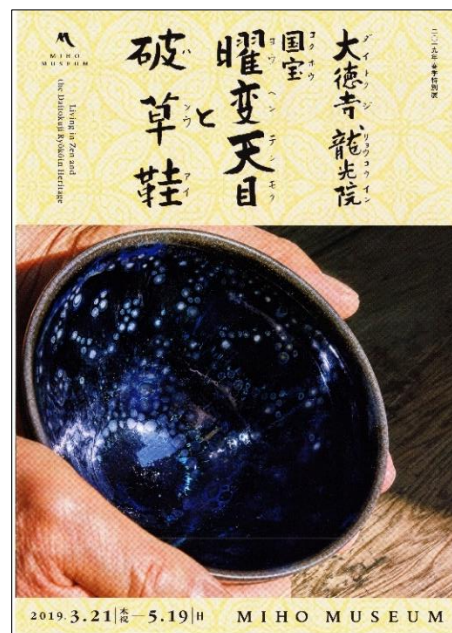
す。他の三碗は重要文化財の曜変（曜変）天目（ミホミュージアム蔵）、重要美術品の曜変天目（根津美術館蔵「油滴天目」）、曜変天目（徳川美術館蔵「油滴天目」）です。今回の国宝曜変天目の展示に合わせてミホミュージアム所蔵の重要文化財 曜変（曜変）天目も展示されていました。



展示会場入口ロビー

さて冒頭にも述べましたが、この春は国宝の曜変天目三碗がほぼ同時期に各所で展示されます。最後にその展示会を時系列で紹介させていただきます。

まず、最初に始まるのは私も行きましたミホミュージアム（滋賀県）です。



会期 2019年3月21日（木・祝）～5月19日（日）

二番目が静嘉堂文庫美術館（東京）です。



会期 2019年4月13日（土）～6月2日（日）

最後が奈良国立博物館（奈良）です。



会期 2019年4月13日（土）～6月9日（日）

このように三館の会期を見比べると三碗が各所で同時期に展示されるのは

2019年4月13日（土）～5月19日（日）の約一ヶ月です。ちょうどゴールデンウィークをはさみ気候も一年を通じて最も良い時なので新しい時代の幕開けとともに曜変天目に出会いにお出かけされてはいかがでしょうか。

活動報告

特別講座「金継ぎ技法と装飾」開催

開催日：平成31年2月24日

場所：清水焼の郷会館1階多目的室

講師：平野雅子先生

京都府立陶工高等技術専門校

「金継ぎ」という本来の手法は、器の欠けや割れを漆で継ぎ、継ぎ目に金粉や銀粉を装飾する日本独自の手法である。今回の特別講座では、制作時間や安全面から簡略化し、金継ぎの技法を習得する体験講座とした。まず、金継ぎに関する簡単な講義を受けた後、破損してしまった器を修復したり、持っている器にワンポイント装飾をほどこしたりする作業を行った。用いた材料に関しては、漆ではなく、カシューを使用し、金粉や銀粉の代わりに真鍮粉を使用した。さらに、接着や穴埋めにはエポキシ樹脂を用いた。

当日は、講師の平野先生、寺池会長、今井副会長を始めとして、会員8名に非会員1名が参加した。金継ぎ作業を行うために参加者の多くは一部破損した器などを持参していたが、適当なものがない方はその場で器を割ることからスタートした。まず、割れてしまったものはボンドを使って接着し、凹みや穴の部分にはパテで修復した。ボンドやパテが固まれば、その上から赤い漆と言われるカシューを薄く塗りつけ、半乾きの間に真鍮粉を播いて仕上がりとなる。出来上がってみると、真鍮粉の色は金粉と比べて遜色なく、立派な「金継ぎ」になっていた。



平野先生に「金継ぎ」を習う

平成 31 年度 総会 開催

開催日：平成 31 年 2 月 24 日

本年度も清水焼の郷会館 2 階会議室において総会が開催された。

まず、議長として寺西運営委員が選出され、総会議案の審議に入った。委任状も含めた出席者数は 25 名（出席者：会員 8 名、委任状：会員 17 名）で、全会員数 43 名に対して過半数を越えており、成立が確認された。理事側からの出席者は寺池会長、今井副会長、谷口副会長、三谷会計監査の 4 名であった。

続いて、増田庶務幹事と片岡会計幹事による各議案の説明とともに、その内容について審議が行われた。主たる議題は次の 2 点であった。

■ 昨年度の作品展では、出品者数が例年に比べて少なかったため、作品展事業費決算が赤字となり、基金特別会計から補填された。この傾向は今年度も続くと予想され、本年度の基金特別会計の予算に計上した。

■ 今年度の第 7 回作品展は、みやこめっせで開催されることに決まっているが、開催期間は例年より早い時期になっているので注意する必要があるとの報告があった。

第 7 回作品展 開催期間

令和元年 9 月 13 日 ～ 9 月 17 日

以上、これらを含めてすべての議題について承認された。

今回の総会は、当初、懇親会に合わせて京都駅前のレストランを予定していた。しかし、懇親会への出席者が少数であったため、急遽、清水焼の郷会館に変更し、特別講座出席の皆様には総会への出席をお願いした。その結果、上記 8 名の出席を得た。次年度の総会には時間の許す限り、是非とも出席をお願いしたい。

なお、このような事情から、倶楽部としての懇親会は中止とし、有志だけの懇親会となった。

会員便り

個展・グループ展・企画展・公募展 (平成 30 年 10 月 ～ 平成 31 年 3 月)

京都・やきもの倶楽部に所属されている方々の展覧会で、会員各位の活動状況をお知らせするために設けました。掲載希望の方は、どのような規模の展覧会でも結構ですので、ふるってお申し込み下さい。用紙は、すでに配布しております「展覧会情報」掲載申込書の最新版（2017/11 発行）をご利用下さい。

平成 30 年

■ 10 月 30 日 ～ 11 月 3 日

第 6 回 京都・やきもの倶楽部 作品展

京都市勧業館 みやこめっせ 2F

美術工芸ギャラリー A（京都市）

京都・やきもの倶楽部 会員

■ 11 月 2 日 ～ 11 月 25 日

改組 新 第 5 回 日展

国立新美術館（東京都 港区）

加藤 丈尋（入選）、谷口 正典（入選）、

森田 隆司（入選）、和田 真理子（入選）

■ 12 月 15 日 ～ 1 月 12 日

改組 新 第 5 回 日展 京都展

みやこめっせ 地下 1 階 第 1 展示場

（京都市）

加藤 丈尋（入選）、谷口 正典（入選）、

森田 隆司（入選）

平成 31 年

■ 3 月 23 日 ～ 4 月 6 日

国際アマチュア陶芸展 伊万里 2019

伊万里・有田焼伝統産業会館 1 階 展示室

（佐賀県 伊万里市）

増田 淳三（入賞：最優秀賞（鍋島大賞））

凡例

■ 開催期間

展覧会名

展覧会場（開催地）

出品者名（入選、入賞）

編集後記

本号の「展覧会見聞録」には三谷さんの寄稿で曜変天目の観覧記が掲載されています。私も数年前に NHK のドキュメンタリー番組を見て興味を覚えました。国宝の曜変天目が発する色の変化(光彩と呼ぶらしい)の原因を科学的に分析するという内容でした。番組は、中国で新しく出土したと言う天目茶碗の化学組成分析をするというもので、何故光彩が出るかについては言及されていませんでした。

その後、この番組に出演されていた長江惣吉さんの個展が開かれるということで、三重県瀬戸美術館まで見に行きました。偶然でしたが、長江さんにお会いすることができ、少しお話を聞かせていただいたのですが、作り方としては蛍石（弗化カルシウム）を使った酸性ガスによる反応と考えておられるようでしたが、詳細はよくわかりませんでした。

私は、NHK の番組を見た時には、光彩の様子から言って器の表面にできた薄膜による干渉だろうと確信しました。インターネットのウィキペディアで調べますと、1953 年に「古文化財の科学」という本に、同じ説明が発表されているのが判りました。これを手に入れたくなり、調べますと、丁度その復刻版が販売されていたのですが、価格が 6,480 円と高すぎて、いまだに読んでいません。どなたか、この本を所蔵している施設をご存知でしたら教えて頂けませんか。その内に自分でも曜変天目を再現させてやろうと、密かに考えています。ご期待ください。

来週には MIHO MUSEUM に大徳寺龍光院所蔵の曜変天目を、そして 5 月の中頃には奈良国立博物館に藤田美術館所蔵の曜変天目を観に行こうと計画しています。

(編集委員 片岡俊彦)

[京都・やきもの倶楽部 ホームページトップに戻る](#)